勝浦漁業史の生き証人、石橋宗吉

紀伊・房総 くろしお物語 ◇8◇

絵と文・熱田親憙　題字・熱田秦華

書籍『一本釣り渡世』（筑摩書房）のカバーと千葉・勝浦の観光地図

「くろしお」の歴史を追って文献を調べている中、房総人がもろ手を挙げて紀州漁民を歓迎している書籍に出会った。漁師・石橋宗吉の語りを記述した『一本釣り渡世』（1996年、記・加藤雅毅、筑摩書房）だ。

宗吉は1901年、現在の千葉県勝浦市松部で生まれ、12歳で漁師になった。代々、弥惣兵衛と名乗る漁師の家系であり、大正、昭和の勝浦漁業史における生き証人だった。

宗吉は曽祖母・きのから、紀州の櫓漕ぎ唄を教えられたという。「沖の暗いのに　コイショイ　白帆が見える　ヨーイヨイ　あれは紀の国　コイショイ　みかん船　ホーラヤッササホーラヤッサ」。イワシの八手網漁の唄である。この唄で育った宗吉少年は、紀州の漁師と八手網に親近感をもっていた。その背景を、歴史からひもといてみたい。

漁村繁栄の発端に

西の紀州には優秀な漁法と漁具があり、東の房総半島沿岸域にはイワシがいた。イワシを乾燥させた干鰯は近畿地方の綿作、紀州のかんきつ類、徳島の藍など換金作物の肥料になった。この干鰯を求め、紀州漁民の出稼ぎが始まったのが16世紀中ごろ。漁民が房総に持ち込んだ漁具は、地引き網と八手網の2種類であった。八手網は複数船で網を水中に敷き張り、魚が網の上に来たところで引き揚げるもの。勝浦を含む太東岬より以南の岩礁地帯では八手網、北部の九十九里浜では大地引き網が用いられた。八手網は明治中ごろまで使われたという。

勝浦に紀州の網をもたらしたのは、僧門の人たちだった。1583年、紀州・湯浅村の西光という僧が、石山合戦で信長に追われた門徒9人を連れ、現在の勝浦市鵜原に逃れてきた。豊漁と聞き、後を追ってきたのが紀州・加太浦の大甫七十郎だった。彼が勝浦の南隣の現在の同県鴨川市天津を根拠地に、八手網を下ろしたのが16

17年のことだ。好漁だったので翌年、紀州・湯浅村と栖原村から2人の漁師を呼び、少し北上した岩和田（現・御宿町）と岩船村（現・大原町）で本格的な操業を始めた。こうして江戸時代初期、紀州漁民はイワシで外房総を花盛りにした。

外房の基地になった天津では、栖原村をメインに、湯浅村や塩津浦から400人以上の漁民と商人が集まり、漁業の流通基地として発展した。干鰯商人は浦賀（現・神奈川県横須賀市）に中継基地を置き、大量の干鰯を関西に送った。しかし、1703年の元禄地震による津波被害を境にして、漁の主役は紀州漁民から、地元・房総の漁民へと受け継がれていった。

こうして俯瞰すると江戸時代、勝浦の浜が湯浅漁民によって漁村の黎明を迎えたさまがぐっと身近に感じられる。次回、紀州漁民に学びながら勝浦で活躍した宗吉の漁師ぶりを紹介したいと思う。